

共生型施設に集う

そろいの帽子をかぶつた若者2人が、畑で草刈りをしている。細い竹の棒を持つた男性（67歳）が、その横を通り抜ける。

若者が立ち上ると、「(今度は) そっちの方を刈ってね」。この初老の男性が指示を出した。

小諸と上田の間に位置する旧北国街道の宿場町、東御市田中^{はつこくとうみしだなか}。6月3日、その一角にある宅幼老所「岩井屋」の畑で、男たちが農作業に精を出していた。若者には知的障害がある。初老の男性は2年前に認知症と診断されている。

初老の男性は、付きつきの介護が必要なわけではない。ただ、判断力が低下し、もう自宅の仕事場には立てない。症状が出るようになつてから、豆やトマト、ホウレンソウ作りを覚え、今は若者たちの農作業を指導する。

「手をかければその分、成果が出る。農業はおもしろいよ」。そう言つて汗をタオルでぬぐつた。

岩井屋は、いわゆる「共生型」と呼ばれる施設だ。障害者や認知症の人、夕方は学校帰りの障害児……。年齢や障害、病状の違う人たちが、毎日30人ほど集う。

初老の男性は、認知症のうちで数パーセントしかいないとされるピック病を患う。脳の前頭葉などが萎縮するこの病は、アルツハイマー病とは症状が異なる。自分のやり方にこだわつたり、同じことを繰り返す。時に周囲との摩擦も起きる。

妻は「周りには理解されないだろう」と思い、診断後も近所に病気を告げていない。

デイサービスの利用を考えた時、年配のお年寄りと同じように過ごす施設を夫が気に入らないのは、目に見えていた。「いろんな人がいるあそこなら、何かやりたいことができるはず」と担当のケアマネジャー（55歳）が勧めたのが、岩井屋だった。

毎週木曜日に通うようになつて2年。今では「来てくれるとき作業が引き締まる」とスタッフから歓迎される存在だ。「あの人迷惑をかけずに過ごしているなんて……」。妻は少し驚きながら、日々を見守っている。

岩井屋では、介護保険サービスの利用者が15人。このうち、初老の男性のように年齢が40～60代の利用者は9人いる。

「同じような症状の人だけだと助け合えず、スタッフも大変」と管理者の岩井孝司さん（46歳）。「それぞれが役割を得て、共同体的なつながりをつくるから、気持ち良く過ごせている」とみる。

開所は2006年1月。共生型にしたのは「利用者を広く確保したい」という経営上の理由だった。発祥の地といわれる富山県内の情報を知り、介護施設でも定員内なら障害者

自立支援法に基づくサービスを提供できる「基準該当」と呼ばれる措置を、市に認めてもらつた。

ただ、「障害者の施設が不足しているため」の特例的な対応で、広く周知はされていない。09年4月の県の宅幼老所調査で、同法に基づくサービスを提供していると答えた県内宅幼老所は、回答した371カ所の6・2パーセント、23カ所。富山県は共生型施設への介護報酬などの加算を要望しているが、国も様子見で、実現していない。

「お帰り！」6月1日、知的障害がある高橋卓也さん（24歳）が散歩から戻ると、46歳の女性が声をかけた。高橋さんと手をつないでソファに座る。彼女も認知症と診断されている。

高橋さんは時々、何かに腹を立てたような声を出す。女性が寄り添うと笑顔に戻る。彼を落ち着かせることが彼女の役割。自ら進んで高橋さんに話しかけている。

いつだつたか。岩井さんは、見学者にそんな光景を「まるで雑踏ですね」と言われたことがある。だからこそ、認知症の人には大切な役割を果たしてもらっている。「最高の褒め言葉」と思つてゐる。